辻晶子著

『児灌頂の研究—犯と聖性—』

渡辺麻里子

本書は、大阪経済大学の辻晶子氏による学術論文集で、二〇一八年に提出した博士論文を中心に、「児灌頂」関係資料の翻刻・影印を加えて刊行されたものである。全三五三頁の内、前半の一七二頁までが論文で、一七三頁以降を資料編としている。

論文は、第Ⅰ部「児灌頂の基礎的研究」と第Ⅱ部「児灌頂の諸相」に分かれている。第Ⅰ部は第一章～第三章と二つの「付論」から構成され、主に「児灌頂」に関する諸伝本を整理紹介する。第一章「諸本の分類」では、「児灌頂」に関連する資料全十七本の伝本を紹介し、その内の①～⑭の十四本についてⅠ～Ⅴ類に分ける分類を示した。

その分類によれば、Ⅰ類の⑨⑩⑭の三本と、Ⅰ類（派生型）の⑫の一本は、児灌頂の儀軌とその私記から構成され、実践と教理の双方を記した中心的なテクストであり、Ⅱ類の⑪比叡山無動寺蔵本は、四種の儀軌の集成、Ⅲ類の②叡山文庫天海蔵の一本は、児灌頂の儀軌に房事作法等が加わったもの（後章で述べる、⑮立教大学蔵本と、⑯⑰の天王寺一如蔵はここに加わり、計四本になると思われる）、Ⅳ類の①⑬の二本は、児灌頂の儀軌の口伝別紙・切紙であるとのことである。

この他、西教寺正教蔵『秘伝抄』など胎内五位図や胎内十月図を記した「胎生学的教説（赤白二滴）」のⅤ類六本は、児灌頂の諸本ではなく、児灌頂に接続するテクストとして別に捉えるべきとする。第Ⅰ部の末尾には「付論『胎内口決』に関する覚書〈附翻刻〉」として、Ⅴ類に関連する『胎内口決』の諸本の解説と西教寺正教蔵『胎内口決』の翻刻を付す。

「児灌頂」の諸書は、仏書ではよくあるように書名が一様ではないため、実際に原本の内容を確認しないと比定ができない。辻氏は、『渋谷目録』に掲載されない三本（立教大学本と天王寺一如蔵本）を加えた十七本の伝本の存在を示し、そのうち十六本の伝本を実見して伝本の整理を行った。これにより「児灌頂」の諸本が概観できることとなった。なお辻氏は「閲覧制限の情報が錯

綜している向きがある」（二二頁）と述べるが、叡山文庫では、確かに児灌頂関係書目が閲覧停止となっていた時期がある。一時期、閲覧可能となったが、現在は再び閲覧停止となっている。

第二章「児灌頂の儀軌」では、Ⅰ類の⑩叡山文庫真如蔵『児灌頂私記』と同一内容の⑭天王寺蔵『児灌頂口決相承』を用いて、児灌頂儀軌の内容を紹介しその意義を検討した。Ⅱ類伝本との比較検討を行った結果、Ⅰ類の伝本は次第（儀軌）に教理の面からの意味づけと注釈（私記）を施し、儀礼の体系化を意図したものであること、Ⅱ類は実践の具体的事例を記してデータベースを作成したもので、編纂の目的が異なるとする。また即位灌頂において王を大日如来と同一化するのと同じように、児灌頂は、児の身体を素材として観音をその場に作り出す儀礼であったのではないかと結論づけている。

第三章「談義所での書写活動」および付論「美濃国深瀬談所について」では、児灌頂の諸伝本の書写奥書に注目し、児灌頂が談義所寺院で書写されていることを指摘する。奥書等一覧には、世良田長楽寺、東光寺不動院、千妙寺、金鑽談義所等々の著名な寺院名の他、幸海、尊栄、亮珍などといった著名な僧名も確認できて、大変興味深い。

第Ⅱ部は、第四章から第六章までの三章構成である。第四章「異本『弘児聖教秘伝』考」では、叡山文庫天海蔵『弘児聖教秘伝私』の内容をA～Iの内容に分けて紹介する。その上で、Aの「児灌頂」とBCの日吉山王関連記事は他の伝本にも見られるが、D～Gの部分は異本『弘児聖教秘伝』のみの記事であり、ここに「児灌頂」とは無関係な、児に関する秘伝をまとめていること、このD～Gの独自部分に近世の好色物との類似が見られることを指摘する。第五章「児灌頂と今東光『稚児』」では、今東光の小説『稚児』の出版事情を詳述し、小説『稚児』と児灌頂の諸書との関係を分析する。今東光の『稚児』が、異本『弘児聖教秘伝』のD～Gの部分も含めて児灌頂として紹介したことがミスリードとなり、世間に強い印象を与えて「児灌頂」に対する商業的な関心を招いたのだと指摘している。

第六章「口伝別紙『櫛口伝事』『櫛譜秘事』考」は、児灌頂の実態を解き明かす上で不可欠な資料として、叡山文庫真如蔵『櫛口伝事（含・櫛譜秘事）』を紹介する。僧が児の髪を梳る「櫛」についての由来や縁起、作法の口伝を記したもので、児灌頂の次第で用いられる「櫛」の秘伝であることを指摘する。最後に結章にて論を総括し、今後の課題を述べた。（以上、一～一七二頁）

後半の「資料編」（一七三～三四五頁）には、児灌頂関係書諸伝本の翻刻・影印が付される。「一」に、児灌頂の関連伝本十七本の書誌情報および奥書情報を提示し、以下「二」～「五」に、四本の伝本の本文を提供した。（なお、十七本の伝本の書誌での番号は、第一章と付された番号が異なる。一章の十七本の伝本番号（①～⑰）と資料編「一」（一～一七）の対応関係は、以下の通りである。①一〇、②七、③一一、④一二、⑤一三、⑥一四、⑦一五、⑧一六、⑨三、⑩一、⑪六、⑫四、⑬一七、⑭二、⑮九、⑯八、⑰五。）

「二」は、児灌頂の中心的テクストとするⅠ類の伝本の一つ、

天王寺蔵『児灌頂口決相承』の翻刻と影印で、「三」はⅠ類（派生型）とする成菩提院蔵『児灌頂式』の翻刻である。ただし「三」の成菩提院蔵本は、目次や見出しに「翻刻・影印」と記すが、影印は見当たらない。「四」はⅡ類の叡山文庫（無動寺蔵）『児灌頂次第』の翻刻、「五」は立教大学蔵本の翻刻と影印である。この立教大学蔵本は、分類が示されていないが、「本文の内容は、同名の資料である②叡山文庫天海蔵『弘児聖教秘伝私』と共通している」（二八頁）とあるため、Ⅲ類の本文として提供されたものと思われる。「三」～「五」において、辻氏が児灌頂の関係書目として分類を示した、Ⅰ類・Ⅰ類（派生型）、Ⅱ類、Ⅲ類の四種類各々の伝本について、本文が提供されたこととなる。（以上、一七三～三四五頁）

本書の「児灌頂」研究における意義としては、大きく二つ挙げられる。第一に「児灌頂」の関連書目についてその内容を整理し、伝本を分類・提示した点である。Ⅰ～Ⅴの分類整理（二九頁）は、今後の研究における指針となる。また「児灌頂」に付帯する資料として、口伝別紙の「横口伝事」の存在を明らかにした。第二に、研究上依るべき本文として、Ⅰ～Ⅲ類の各伝本四種四本の翻刻本文および影印の全文提供がなされたことである。今後研究者は「児灌頂」について、本書所載の本文を用いて論ずることが可能となったのである。

「児灌頂」は、中世文学研究において、寺院における児の位置づけ、儀礼的側面、寺院における男色、中世における聖と性など、様々な観点から論じられてきたが、本書で児灌頂の本文が提供されたことにより、今後、議論が深められることになるだろう。私もまた、本書によって実際に本文を見ることができたのだが、個人的な関心で言えば、児灌頂に「慈覚大師私記」（二七〇頁）、「恵心述」（二七五）と記される点が注目される。また諸伝本の識語・奥書に、「右此口決ハ極大秘事也／顕密共ニ秘タン人ニハ可見不／非器ノ人モ不可見／千金莫伝」（二〇四頁）、「灌頂秘曲／此切紙秘蔵」（二五五頁）などと記されたり、「初重」（二七〇頁）とあり、灌頂における児灌頂の位置付けが如何なるものであったのかなど、疑問が尽きない。

もう一つ、私の関心に寄ってしまうが、本書には談義所研究上の意義がある。天台談義所では様々な書目が学ばれ書写されるが、本書によって「児灌頂」の諸書も談義所において書写伝授されていたことが明らかとなった。また天台談義所間のネットワークの解明は重要な課題であるが、比叡山と関東への知の伝播を考える上で、美濃国談義所は重要だと認識されながらもなかなか調査が進んでいないところであった。本書による美濃国慈明院の調査成果の報告は、新しい知見を提供するものであり貴重である。

なお細かなことであるが、辻氏は第一章冒頭で、渋谷亮泰編『昭和現存天台書籍綜合目録』における児灌頂の分類位置が末尾の「雑部」であることから、「児灌頂がいかに天台宗典の主流から逸れたものと見なされていたか」（一九頁）と述べるが、『渋谷目録』の掲載順は、宗義における軽重を示すものではないことを指摘しておく。

最後に、本書は「児灌頂」の基礎的な考察と基礎資料の提示をし、「児灌頂の諸相を問い直す問題提起」を企図するとして、その目的を遂げている。私も本書から様々に貴重な知見を得ることができた。なおできればもう少し教えていただきたいと思うことがある。以前辻氏が学会発表をされた折に、「なぜ「児灌頂」を扱うのか」と会場から質問が出されたが、その問いには私も同感である。本書のあとがきには「仏教美術の講義で、誘めく儀礼に鮮烈な印象を受け「あやしさ」を感じた」と記されるが、関心を持った契機が何であれ、児灌頂を研究する意義は何であるのか、児灌頂を通じて何が明らかになるのか、今後研究の進展とともに、さらなる御教示をいただけたら誠に幸いである。

（A5判　三五七頁　二〇二一年二月　法藏館　八五〇〇円＋税）

（わたなべ　まりこ・大正大学）

中前正志

『寺院内外伝承差の原理
―縁起通史の試みから―』

阿部泰郎

この一冊は、至るところ探究と発見の歓びに満ちている。前著『神仏霊験譚の息吹き―身代り説話を中心に』（二〇一一年）に続く本書は、同じく身代り説話を中核とする縁起の通史的研究二篇

を含む三寺院の縁起を第一部に「試論」とし、各篇毎に付論を付し、第二部を「寺院内外伝承差」について三寺院の縁起を「補論」三篇により扱い、全体を仮説提示によって総括する、構築的な布置を以て編まれる。

試論で扱うのは、穴太寺縁起（揺らぐ檀那）と成相寺縁起（分岐する開山）、そして谷汲寺縁起（移りゆく願主）という、西国観音霊場の縁起であり、補論も三室戸寺（観音発見者の収束）、清水寺（楊柳観音の波紋）、そして鞍馬寺（草創の遡及）と、前二者が観音霊場、最後こそ毘沙門だが観音有縁の尊格であり、各論タイトルの形容動詞が端的にその縁起の特徴的動態を捉える視点を示している。付録に『西国三十三所霊験画伝』を加え、霊験寺院の〝縁起通史〟の探究を介し、その応現変化する本尊の霊験と寺院をめぐる言説の変遷を個別から普遍的な「原理」として把握しようとする、意欲に満ちた企てである。しかも通時的には、古代中世で終えず、近世から現在に至るまでの流動を見のがさない、徹底した追尋は、まさしく「通史」と称すにふさわしい。

著書が本書において目指したのは、それら霊場寺院の縁起の核心をなす本尊仏の顕現や功能を（感得する主体の様態を含んで）縁起としてテクスト化する過程を全面的に把握することであり、その上で、これらの縁起テクストが示す変遷の様相に類型（パターン）を見いだし、これに一貫した論理的説明を与えることであった。その認識への欲求が、択ばれた各寺院の縁起資料の徹底した収集と、本書の記述の大半を占める、その比較から現象する、いかなる差異も見逃さない、微に入り細を穿った分析による〝位相差〟の検出である。その結果は、全ての寺院縁起に現象する、著者のいう「寺院内外の伝承差」の認識に至る。その好例が、最後の鞍馬寺縁起での、延喜年間の峯延の古縁起と宝亀年間の鑑禎の新縁起が交替し、かつせめぎあう事例であり、また仮説提示において、前著に続けて検討される、泣不動説話の、三井寺から清浄華院へと本尊と縁起が遷される、発信と享受の相関であろう。

種々の様相を示す「寺院内外伝承差」と著者の呼ぶ現象を、試論と補論から帰納し、それらに通底する「法則性」を見いだして、これを「最終的な結論として」「寺院内外伝承差の原理」（478～9頁）の仮説として提示するのが、本書の焦点である（これも、試論・補論と同じくA・B・Cの三段階で示される）。それは次のように要説することができる。

A　寺院縁起は、その内部と外部で伝承に差異を生ずることがあり、それは、寺内の本伝に対し寺外で本伝が生ずる例（ケース）と、寺内で旧伝から新伝が生じてもなお寺外で本伝が流通する例の二類がある。

B　それらの伝承差は、ただちに解消されず、継承されることがある。

C　いずれは異伝も旧伝も、寺内の本伝や新伝に統一され、内外の伝承差は解消されていく。

どの寺院縁起も、右のような展開を通時的に示すことについて、更に五箇条の付則が注として加えられ、寺院内に発する伝承が外部の享受者へ展開していく過程にも適用されることなどが示される。更に、この「原理」の応用として、再び成相寺縁起を例とし

て、近世に至り漸く寺内で成立した縁起が寺内外に亘り汎く流布するに至る帰結が他の場合にも等しく認められることが予想されている。

結論で著者は、僅か六箇寺の縁起事例を以って「原理」を論ずることへの懸念を語るが、事例の多寡の問題ではなかろう。むしろ結論として書名にも題する「原理」の語が適切ではないのである。前の三箇条は、どう読んでも、縁起の示す最大公約数を一般化した要約であり、あえて言うならば「法則」であろう。そうした現象が何故生ずるのか、「原理」とはその原因となる運動を生起させる普遍的論理（物理学の方程式の如き）として示されるべきだが、本書の何処にもその「理」は説明されない。実に興味深い変貌の動態を示すこれら縁起の、その運動を生じさせる要因と論理をこそ、問うて欲しかった。

この、縁起が現象する流動・遷移・分岐・拮抗・波及・遡源・融合・帰一など諸位相の動的関係性が何によって生み出されるか、縁起は媒体（メディア）でもあるが、それを創り、操作し、享受し解釈する主体（発信者かつ受信者）の意図や社会的・歴史的文脈（コンテクスト）を巡っての問いが（たとえば穴太寺における宝徳の「重修縁起」撰述や、その本文を詞書とした狩野永納描くところの近世前期の絵巻化などについても）更に問われてよかったのではないか。

その問いは、本書の重要な視点である「寺院内外」の伝承主体である、霊場寺院の内部と外部とは一体如何なるものか、という問いとも連なる。意外にも著者はこの内部と外部については殊更に論究しない。それが端的に示される鞍馬寺の場合は、もと東寺の末にあったのが、後に叡山無動寺の末寺、青蓮院の管轄下に置かれるに至って、天台宗の起源に連なる表象として新たに「鑑禎」開基を説く『蓋寺縁起』が成立するとすれば、天台宗山門派、青蓮院門跡こそ「外部」の支配者であり、新縁起（および喪われた中世掛幅縁起や狩野派と幕府権門による縁起絵巻）の制作主体であったろう。なお、鞍馬を介しては更なる「外部」の縁起が成立した。同じく叡山無動寺僧であったが大原に遁世した念仏聖良忍は、鞍馬の毘沙門から名帳勧進の方便を示され、全国貴賤上下がその結縁により往生の霊験を蒙る、融通念仏縁起が中世に生まれる。また、幸若の『鞍馬常磐』は、鞍馬寺内陣に「推参」した常盤御前が、女人禁制を楯に排除しようとする寺僧（内部の代表）に対し、全く異次元の縁起（女院の御墓所）を説いて論破するのであり、ジェンダーの水準においても内部と外部のせめぎあいは繰り展げられ、最終的には、近代に至って、牛若丸の師匠筋である「魔王尊」の金星からの降臨という超越的な神話創造により「鞍馬弘教」宗の独立が果たされるに至る。

著者が提起した、寺院の内部と外部という伝承主体への問いは、単に「外部」と一括し得ない、複数の寺院にまたがる巨大な伝承主体を想起させる。それが三井寺（寺門派）である。早く観音巡礼の霊場と本尊を示した行尊も覚忠も、共に寺門の修験先達であり、寺門伝記がその媒体であった。また、これら霊場寺院の縁起を多く載せる「外部」テクストの典型である『扶桑略記』が十二世紀の寺門派による編纂であることも最近の研究により明らかになった。この他に善光寺や四天王寺など、中世の中心的な霊

場を院政期に支配していた三井寺が、そうした霊場寺院の縁起説を介するネットワーク化によって及ぼした影響は、たとえば本書の三室戸寺の縁起においてもその一端がうかびあがることだろう。しかし、その巨大な影は、中世の黄昏のなかで次第に没落し、薄らいでいく。三井寺常住院の泣不動が、その本尊絵像もろともに浄土宗の清浄華院に拉し来られ、いつしかそちらが縁起絵と共に霊験唱導の本所と化していったのも、その一例といえようか。本書の中に盛り込まれた豊かな霊験縁起の寺院間交流の諸相は、なお多くの連想を誘って止まない。

始めに述べたように、本書は探究と発見の歓びに満たされている。余すところない縁起文献の探尋とその精細な比較検討、その読みから立ち上がる縁起言説の細部に隈なく目配りすること、そこに見いだす矛盾や微妙な揺らぎに、仏と人との親密かつ驚嘆すべき交渉の劇(ドラマ)を読みとる。それは、成合寺の観音を「意地の悪い」と表現するように、著者の対象に対する愛にあふれた解釈から生ずるユーモアに満たされた考察で一貫する。扱われる厖大な資料は、自らの議論の為だけに利用されるのでなく、あらゆるテクストに等しく慈眼もて視るが如くまなざされ、著者がその一つひとつに向き合っていることがよく判る。おそらく、これらの縁起を共に聚め読み、霊場へ詣でたであろう教え子たちとの共同の成果としてもたらされたのだろう、多くの発見の所産が、この一冊に結晶していると推察される。これは、その成り立ちの縁起からしても、縁起研究の里程標(マイルストーン)となるべき著作なのである。

（A5判　五四八頁　二〇二一年三月　法藏館　四〇〇〇円＋税）

（あべ　やすろう・龍谷大学教授、名古屋大学高等研究院客員教授）